

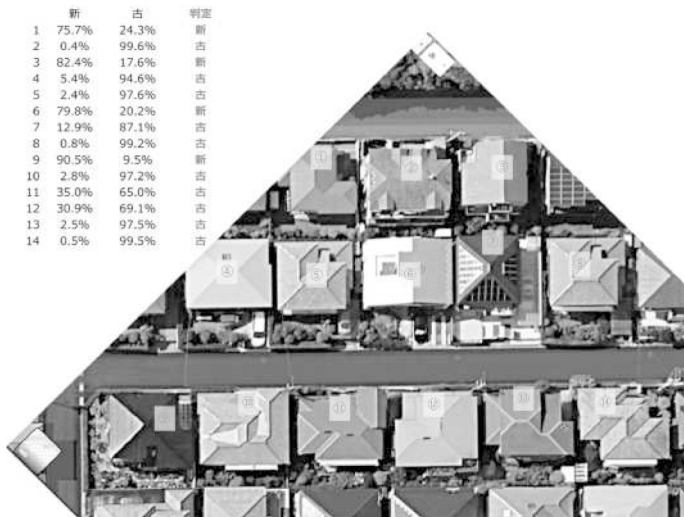
屋根劣化、航空写真で判定

アイ・シー・ジー

【千葉】アイ・シー・ジー（千葉県浦安市、広瀬直樹社長）は、人工知能（AI）を活用して航空写真から屋根の劣化状況を判定するシステム「劣化表情」を開発した。システムを通じて収集したビッグデータ（大量データ）を地域などエリアごとにまとめ住宅1軒当たり200円で不動産業界や建築業界、保険業などに9月から提供を始める。

AIシステム開発 収集データ外販

2020年2月から6カ月かけて約1万件の屋根の劣化状況を広瀬社長が判断し、判断基準をAIに学習させた。この基準を基に航空写真から屋根の劣化状況を自動判定することを可能にした。修理業者と施主の双方が理解しやすくするため、劣化進行度の判定はパーセンテージで表示する。市街地など飛行ロボット（ドローン）を飛ばせない地域でも劣化を判定できる。



環境を調べるために地図アプリケーション（応用ソフト）「グーグルアース」を使用したこと。アプリの航空写真でも専門知識があれば、住宅の屋根の劣化状況を判定できると考え、システムの開発を始めた。

アイ・シー・ジーは、住宅の設計や施工などを主に手がけてきた。広瀬社長は「データ提供を新たなビジネスとして成立させていきたい」と事業の新たな柱に育てる考え。今後、判定時に省かれるソーラーパネルを設置している住宅をリスト化し、提供する方針だ。

不動産業界では、システムを通じて収集したデータを活用することで、訪問営業の効率化が見込める。すでに全国からデータ提供やシステム提供への引き合いがあるという。

システム開発のきっかけは、住宅調査業務で調査対象物件の周辺画像判定システム「劣化表情」の画面。屋根の劣化進行度をパーセンテージで表示する